

先日、「心が熟していれば自然と行動も決まってくる」といった話を友人としました。芸術も同じで、気持ちが言葉になるまで熟すのを待った作品の説得力は読み手にも伝わります。投稿作品が増えて、多くの新しく良い作品に出会えてうれしく思っています。気持ちがしっかりと熟した作品をお待ちしています。

ぷるぷるとゆれる木洩れ日
噂ではあなたが住んでいる街は春
まちりこ 埼玉県

→まちりこ氏の作品は安定した技術力がある。光に立体的な質感を思わせるオノマトペと木漏れ日の取り合わせや、「ぷるぷる」、「ゆれる」、木漏れ日の「れび」と上句が軽やかな音の繰り返しが良い。「あなた」の住んでいる場所もしかしたら天国かもしれない。結句「春」に希望を感じさせる。

窓を開ける
生きている音が聴こえる
すうーっと
わたしに通電する
風船 東京都

→人間として生きるのは、生物として生きるのとはまた違った理の中で過ごすこと。命についた「人間としての垢」が落とされるような清涼感がある。
窓が自身の心のメタファーにもなっており、開けることで他との繋がりが産まれた。そこで作者はぱちぱちと爆ぜるようなたくさんの生きている音を聴き、命の輝きが作者の髪の毛いっぽんまで満ちていく。

ぽほぽほと
傘をめざして落ちてくる
雪の羽音のような溶けかた
さいう 愛知県

→「ぽほぽほ」というオノマトペから、雪に含まれる水分量や大きさの違い、絶え間なく降っている様がしっかりと伝わってくる。また、この作品は傘に落ちてくる雪の溶け方や音が羽音のようだとして描かれている。限定されたことでコンクリや木など傘以外に降る雪の音まで想像させる。作品の世界に奥行きが生まれている。作者の持つ感受性と技術力のバランスがとれてきたように感じる。今後ぜひ頑張っていたいただきたい。

オレンジの光のなかで立ち尽くす
あどけないまま燃えてゆく人
うずたろう 埼玉県

→「オレンジの光の中」というと美しい光に思えるが、人を燃やす光である。
情報を得るための描写がない故に、「人」へのフォーカスがぐっと絞られている。詩に使うと狙いすぎになりがちな「あどけない」だが、何も分からないまま変化させられていく恐ろしさがある。立ち尽くす人の周りに、降るように立ち昇るように巡る光に圧倒される。

網膜に 入射してくる 情報へ
輪郭線を 描いている
君はいつも 鉛筆で描く
西山宗一 神奈川県

→「入射」という光の描写に、作者の世界に対する希望を感じる。その理由は君がいるから。輪郭線を描くことで、作者は膨大な「情報」を噛み砕き落としこむことができる。輪郭が描かれた情報の中で、君だけが柔らかい線で囲まれている。鉛筆の滑らかでけぶるような輪郭は、作者が君を見るときに眼差し。

夢も希望も優しさも
そこに無ければいいですね
Froo 京都府

→膨大な商品が陳列されている百円均一。店員から「そこになければいい」と言われたらいい、というのは有名な話である。私たちの夢や希望、優しさは商品のようにならなくても入荷可能ではない。しかし求めれば常にあると思いつく人は一定数いる。「ないですね」と明確に距離を置きはっきりと切り捨てる躊躇のなさ。また、「そこ」を指す場所を考える。作者自身の心か、この世の未来か。

るるると遊ぶ日もある熱帯魚
奎いう子 佐賀県

→遊んでいる描写が巧い。水中で揺れるひれの動きが伝わってくる。「遊ぶ日もある」ということは、遊ばない日や他のことをする日もあるということで、熱帯魚の思考の幅を自然に感じさせる。魚も遊びという娯楽を選択するのだ。鼻歌をうたうように「るるる」と泳ぎ

遊ぶ。水槽の中で生涯を終える熱帯魚の数少ない自由である。

爽やかな歩幅に進む車椅子

山本先生 東京都

→「冬すみれ歌は歩幅を整える」「春に蓋してワセリンの厚くある」など非常に良い作品が多くあった。車椅子を押す人物の筋肉の動きや生命力が「爽やかな歩幅」から読み取れる。車椅子に歩幅はないのだが、押している人と乗っている人の心の歩調が揃っているのが分かる明るい作品。